

『方便から眞実へ　浄土真宗』より抜粋

①自心建立の心が自力ではありませんか。

解説 || 自分の心で組み立てた御信心、お聖教を読み、お説教を聞かしていただきて、あるお経にはこう書いてある、あるお聖教にはああ書いてあると読んだ学問、知つた知恵を集めて、なるほどどうか、私のための本願か、私を救うための御廻向かと、学問や智恵で組み立てて、これこれと学者は聚めたお聖教に腰を掛け、組み立てた御信心を、自心建立の心という自力の親玉があるのである。同行は聞かしてもらつた文句を覚えて「たとえ罪業は深重なりとも必ず救うべし」と仰せられた、「生まるべからざる者を生まれさせたればこそ、超世の悲願とも横超の直道とも習いはんべれ」と書いてある、「真に知んぬ、弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるが故に龍華三会の曉、まさに無上覺位を極むべし、念佛の衆生は横超の金剛心を窮むるが故に臨終一念の夕、大般涅槃を超証す」とお説教を聞くと、自分が横超の金剛心を

究めたように、自惚^{うぬぼ}れているが、そう書いてあると披露^{ひろう}しているだけですよ。

「たとい罪業^{ざいごう}は深重^{じんじゅう}なりとも必ず救^{すく}うべし」と、救われた蓮如さまがお書きになつたので、あなたは読んでお言葉^{ことば}がありがたいので、あなたは罪業深重^{ざいごうじんじゅう}がどんなものやら、苦しいものやら知らないで、それで救^{すく}われたつもりでいるのですから、自惚^{うぬぼ}を通り越^{とお}して^こいるのではありますか。「生まるべからざる者^{もの}を生まれさせたればこそ」とありますが、あなたは生まるべからざる者^{もの}で泣^ないたことがありますか、生まれましたか、開発^{かいはつ}しましたか、晴^はれて大満足^{だいまんぞく}をしましたか。お説教^{せつきょう}を聞きにきたときは、あなたの本性^{ほんじょう}は秘密^{ひみつ}の部屋^{へや}で昼寝^{ひるね}をしているのですよ。表に顕^{おもて}れて^{あらわ}いる感情^{かんじょう}が、お言葉^{ことば}に調子^{ちようし}を合わして^あいるだけですから、心の本性^{ほんじょう}が出てくると、今までいただいていたありがたい感情^{かんじょう}を、みないるだけですから、心の本性^{ほんじょう}が崩^{くず}しているではありませんか。だから何年経^{なんねんた}つても、喜ばれないのです。あなたの本性^{ほんじょう}が

阿弥陀様の狙いですのに、あなたはそれを包む稽古ばかりして、こうおつしやつた、ああおつしやつたと書いてあるものに調子を合わして喜んでいるのを、**自心建立の心**といつて、**自分で組み立てた御信心で自力の親玉**です。自分がそう思うたのではない、思わしてもらつたのだ、といくら**他力**のよう^{たりき}に説明なさつても、二種深心が徹底しない以上は、**他力**の**真似**をしているのですから、人間は誤魔化せても臨終の閑所は通れません。難中の難を突破していないのでですから、あら心得やすになつていません。極難信を通過していませんから、**真の易さ**を知りません。もう一度お聖教を荷うて三惡道を見物しておいでにならねば、**お聖教**の裏に溢れている不思議の**仏智**は諦得できません。

②**信罪福心が自力ですか。**

解説＝罪は恐ろしいから出さないようにし、福はありがたいから表に出してお説教を聞いているのが、みな自力です。今日はお説教を聞きにゆくのだと着物を着替えたときには、悪性の心は仕事着に包んで留守番として、他所ゆきの心が表に出てお説教を聞いているのです。

坊さんは実機を語つてくださる人はなく、三毒の煩惱は往生の邪魔にならないといつていますが、三毒の煩惱は邪魔にならなくても、疑いの煩惱が邪魔になるのです。この疑いが晴れたら、三毒の煩惱は御恩を喜ぶ因と変わるので。

あなたの心は二つあることに気がつきませんか。他人の前で体裁を繕うて真面目そうで、他人によく見てもらいたいという心と、誰にも打ち明けられない、梃子に合わない代物とがおりませんか。これを上の心と下の心といたしましようか。上の心は感情で猿、番頭に喻え、下の心は自性で牛、主人に喻えています。お説教を聞くときには喧嘩をしようと思つて聞くものは一人もいません。みな素直に聞くとしているのです。悪い心は出さないように

して、有難うなろうと思つて聞いているのです。それが信罪福心という自力の変名です。悪い心よ出てくるなよ、お前が出てくるとお慈悲を聞くのに邪魔になるから、出てくるなよ。法を聞くときには有難い心でなければ聞けないと、自分が勝手に決めて、素直な心で本願を受け取ろうとしているのが、自力とは知らないでしょう。悪い心を出さないように包み抑え、有難うなろうとする心が自力なのですよ。そうしなければ聞かれないではないか。そうすることが自力なのです。自力をしなければ他力の境地に進まれないので、御信心をいただこうと手を拡げているところに布教使が、その身そのままその機のなりで、悪い心を直せでないぞ、曲がった根性を正せでないぞ、やりたい放題やりつらせ、飲みたい放題飲み歩け、後を受け持つ親じやぞよ、南無阿弥陀仏、なむあみだぶつ、ええ親じやのう。ずばらをこかすのをよい親のように思い、放縺無慚の者をお救いのように考えてはいませんか。感情で合点するのは番頭が調子を合わすようなもので易いが、自性の特牛牛の主人が

冠かんむりを曲まげては信仰しんこうを崩くずしているから、何十年聞はかされても晴はれた人がいひないではあります
んか。信前信後しんぜんしんごの水際みずぎわを語かたる人がいひとないではあります
んか。感情かんじょうの思おもいがみな尽つきて、仏智ぶつちの不思議ふしきに攝取せつしゅされたのとの、真仮まんかの分際ぶんざいが明らかになつた
人が一人もいひないではあります
んか。感情かんじょうが名号みょうごうに調子ちょうしを合あわしているのが、自力じりきというこ
とがわかりませんか。悪い心わるいを抑おさえて善よい心こころになつてお慈悲じひをいただこうとしているのが、
信罪福しんざいふくの心しんをもつて本願力ほんがんりきを願求がんぐしている自力じりきなのです。

③定散の自力心

解説じょうごく 定じょうとは息慮凝心そくりよぎょうしんといつて、慮おもんばかりをやめて心こころを凝こらすといふことで、雜念ざつねんを払はらうてよ
い心こころになる、散乱さんらんする心こころをやめて心こころを專注せんちゅうするといふ意味いみです。散さんとは、廢惡修善はいあくしゅせんといつて

悪を廃し善を修することで、身口意の三業にかかる悪の行為をやめて、十善業を励むのをいいます。その心で念佛するのを定心念佛、散心念佛といいます。

定心念佛とは夜の寝覚め、澄み切った心のときの念佛、御恩のほどを思い出して、これを他力廻向の称名というのだろう、こんな清いな念佛の時ころり死んだらお淨土に参れるだろう、と思うのが、定心念佛という自力の念佛です。仕事に追い立てられたときの念佛は有難うないから、墮ちはせぬかと思うのです。また、今日は御信心をいただこうと構えているとき、声や節のよいお説教を聞き、感激したときの念佛のありがたさ、天にも昇る気持ちの念佛のときは、これこれ、往生は一定なりと思うでしよう。その反対の気持ちのときの念佛は味がない、あなたの気持ちのよしあしで往生を決めかけているのを、定心念佛の自力というのですよ。

散心念佛とは、悪をやめて善を修する気で念佛をするのですから、布施の行をしたりとい

え、角張つて、います、が、施しを、したり、寄付を、したり、拾い物を、届けたり、した、気持ちの、よいと
きの、念佛は、この、くらい、さして、いた、だくから、悪い、ところには、行かない、だろ。その、反対に、
拾い物を、猫、ババ、決めたり、喧嘩、したり、すれば、こんな、心が、出る、ようでは、往生は、いかが、かと
尻込み、を、する、自分の、心の、善惡を、往生に、引つ、掛け、て、いるのを、散心念佛、といつて、いるの、で、こ
れを、聖人、は、「定散の、自心に、迷うて、金剛の、真心に、昏し」と、叱つて、おられる、の、で、坊さん、が
知ら、ない、の、です、から、同行が、知る、筈、が、ありません。同行たちは、みんな、この、程度の、信仰を、うろつ
いて、いる、の、で、善も、欲しからず、惡も、恐れなし、とい、う、善惡を、超越した、念佛の、独り、作用の、境地ま
で、到達して、は、い、ない、の、です。それは、どこに、欠点、がある、か、といえ、ば、機を、包んで、法ばかり、眺め
さして、いる、第二十願の、柄に、いる、の、で、すから、自分の、善惡が、気、になる、の、です。二種深心が、徹底
して、い、ない、から、です。三毒の、煩惱が、寝て、いる、ときには、お慈悲が、あり、がた、い、けれども、これが
頭を、擧げると、こんな、心が、出る、ようでは、ひよつと、と、疑いが、頭を、出す、から、墮ち、そ、う、に、なる、の

です。真宗では自力も疑いも何にも知らないで、自分は自力を発したこともなければ、疑うたこともないと平氣でいますが、教えるお方がわからぬのですから晴れる筈はあります。自力がつきなれば、他力不思議に到達しないのですよ。疑うたことのない人は、明信仮智の境地に趣入することはできませんよ。今あなたが自力をやりつつ、他力に向つて前進しているのですよ。まだ幼稚な信仰ですから疑いが出ていないのですよ。疑いなく墮ちたときには、疑いなく助かつた世界が開けるのですよ。お進みなさい、進む道がわからぬでしょう、まだまだあなたの信仰は贋物で、開発までには前途遼遠ですよ。腹が立ちましたか、腹が立つた人は見込みがあるのです。腑抜けには奮發心がない、奮發心のない人は求道心がない、求道心のない人は開発まで到達し切らない。

④ 計らうまいと思う心が自力です。

解説 || 往生ほどの一大事を凡夫が計らうたとて何になるものか、といつて いますが、計ら
わないようにしようとしているのが計らいではありますか。聖人は「ようように計らいあ
うて候こそおかしき候」と仰せられてあるではないかと、僧侶は仏さまと遠く離れて無関係
のところにいる。対岸の家事を眺めているのだから気にかからないのです。このお言葉がど
んなところに使用されてあるか御承知でしようか。聖人は後生が一大事になつて二十カ年の
修行を棒にふり、百夜の祈願は血みどろの求道ですよ。あなたは他力に胡坐をかいて、無力
を他力と間違えて信仰に触れてはいないのでよ。一大事の後生になりましたか。後生とは
死後の世界のことではありませんよ。前滅後生といいまして、前の息は死んでいる、後の息
が入らなかつたら次の世界だが、その用意はできたかということですよ。聖人が「計らうの
が可笑しく候」とあるのだから、自分たちは計らうたことはない、情けない信仰ですね、そ
れは後生が気にかかるないのでありませんか。

聖人は求道すればするほど、自分に真実のないことに驚いて、何れの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住家ぞかしと、あのお言葉が出るときは、ぎりぎり舞いの三定死の苦しさですよ。すかされてもだまされても墮ちるより他に道がなかつた、絶対の悪性を知られたとき、絶対の法に逢われたので、法然上人にいわしたならば、極悪最下の機類が極善最上の法に攝取されたので、悪を悪と知らない凡夫が、素直に話を聞いているのとは桁が違うということがわからぬのですかな。一朝一夕で極悪最下に氣のつくような柄ではないのですもの、それが無条件で攝取されるまでが調熟の光明で、果遂の誓いの上を前進さしていただいているので、攝取されたときが攝取の光明に生かされたので、聖人がこの一念を諦得された境地から、「ようように（様々に、ああじやこうじやと）計らいおうて候こそおかしく候」とは、馬鹿を馬鹿と知らないから智恵のある賢い者と自惚れて、ああじやこうじやと文句を並べてみたが、あきれた本願に逢うてみれば、計らいつきて親に計らわれてい

たことの愧しさ、自分の智恵や修行が往生の助太刀になるよう自惚れていが、助けにもならず邪魔にもならず、自力がつきてみて初めて他力不思議の広大なることに驚いた、無上甚深微妙の法に逢わしていただきて、初めて自力無効を知らされ、明信仏智の鮮やかさを諦得さしていただいたとの信念です。

真宗の道俗よ、計らわないように敬遠しているのは無関係なのですよ。あなたの力で計らうてごらんなさい、計らいつきた時が親に計らわれていたことがよくわかります。

何年聞いてもはつきりせず、これでよからうか、どうなつたのが信仰だろうか、どうしたら摂取されるのだろうかと気にかかるのが計らいの最中ですから、あなたの思慮分別がつきますお進みなさい、それを求道というのです。聖人のお言葉を覚えたのは、あなたの信仰にはなりません。聖人は、この道を通れば広い天地があると自分の通られた道を教えておらるるのですから、お言葉の真似をしているのでは、あなたの奴性根は助かりません。

富士山の頂上を極めて降つている聖人と、今から登ろうと二、三合まで進んでいる人と、言葉の真似をしたつて心境に大差のあることを知らねばなりません。

⑤ 今度聞いたらわかるだろうと力むのが自力の心

解説＝淨土真宗は他力の教えだから、自力はないようと思つておられましょうが、開発するまではみな自力が引っ張つてくれるのです。信罪福の心で悪い心を出さないようにして、有難うなろう、話はわかる、理屈はわかる、どうも喜びがでない、どうしたらよいだろうかと小首を傾けたことはありませんか。お慈悲が届いたら喜べそうなもの、何だか心の奥底に気持ちの悪い心がいるが、どうしたらよいだろう、こんど聞いたらわかるだろうか、こんどこそ熱心に聞いたらお慈悲が届くだろうか、とあせる心はいませんか。わかるようと思つて

いるのが自惚れというのですよ、そのあせる心が自力ですよ。凡夫の智慧でわかるのは、
凡夫の世界のことです。わかる、わかる、と引っ張ってくれるのが自力です。聞いても
知つても覚えて、それは人間の計らいの智恵の分際であつて、仏の世界に通用するものは
微塵もなかつたと總てがつきたとき、他力不思議に生かされるのです。これを実地の求道と
いうのです。みなさんは、こんな心はいませんか。私も求道しているときには、自力とも何
とも思わず、わからん、わからんとあせつていましたが、これを開發した後に、これが雑行であつ
たのか、あれが雑修であつたのか、あれが自力の心であつたのかと知らされたのです。だか
ら先に通つた人が、後の人を指導しなければならない。これを自信教人信というのです。
信前のときには雑行雑修自力の心とも知らず、念佛に向いてこれが本当じや、これが本当
じやと思つて進んでいるが、その桁の上を前進しているので、一念の信で仏智が満入して初
めて知らされるのです。

聖人しょうにんが「真しん仮けを知しらざるによりて如來にょらい廣大こうだいの恩おん徳どくを迷失めいじつする」といわれたのが、信後しんごに入はいつて危あぶない芸げい当とうをやつていたなあということが知しらされるのです。